

次 目

記 事	金 光 明 經 に 就 て
	大 藏 經 要 義 繢 篇
開 目 鈔 講 話 第六講	阿 含 の 人 身 觀 (中之二)
國 民 的 理 想	上 小 本 田 多 多 林
	辰 一 日 日 一 卯 郎 生 生 郎

號 月 三 年 二 十 四 第

財團 統一團趣意

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者

本團署則

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許すマル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ謹妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化ヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

◎總持員 本團ノ事業ヲ襄贊シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ醸出セラル、方ヲ正團員
トス
◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布シ國章壹個ヲ贈呈ス
◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

金光明經に就て

小林一郎

故本多日生大僧正は其の一生を法華經の弘通のために捧げられたので、吾等後進は其の教化を受けたことを永く感謝して居る次第である。然るに大僧正は更に法華經の立場から大乘の諸經を解釋することに力を注がれ、其の聖業の完成せぬうちに遷化せられた。法華經が最勝の經であることを明かにすることに、二つの道がある。其の一つは法華經を他の諸經に比べて、諸經よりも深いものであることを明かにすることで、之を稱して「相待妙」といふ。又一つは法華經が諸經を統一するものである、法華經によつて諸經が生命を有するのであるといふことを明かにするので、之を稱して「絕對妙」といふのである。本多大僧正が晩年に至つて、此の絕對妙の立場から大乘の諸經を解釋することに力を注がれたのは、まことに貴いことであつた。其の努力の大部は「大藏經要義」といふ名を以て既に世間に公にされて居

るのであるが、其の完成を見ずして遷化せられたのは返す返すも残念なことであつた。

併し大僧正が晩年に至つて諸經の要文を抄出せられたのを、穢部満事君が筆録して置かれたものが、まだ餘程残つて居るのである。之に就ての解釋がないのは惜いことであるが、併し諸經の最も肝要なところを抄出せられたのは、大僧正の如き高邁なる識見がなければ容易に出来ぬことである。吾等後進は此の抄出せられたものを讀むことに依つて、又大なる教訓を與へられたことを感ずるのである。今回より此の抄出せられたる諸經の要文を『統一』の誌上に連載することになつた事は、まことに有益なる企てと申すべきである。

其の最初に選まれたのが、金光明最勝王經と金光明經との要文である。元來此の經には三種の漢譯がある。其の一は北涼の代に曇無讖の譯したもので、『金光明經』と題して四卷ある。其の二は隋の代に至つて寶貴等が之を増補したもので『合部金光明經』と題して八卷になつて居る。其の三は唐の義淨の譯したもので、『金光明最勝王經』と題して全部十卷である。此の第三の譯は原本も最も完備したものであり、又譯文も優れて居るので、三種の中の最上のものと稱せられて居る。併し曇無讖譯の『金光明經』にも、また多くの長所が見出されるのである。本多大僧正は此の義淨のと、曇無讖譯のと、兩方から、

吾等に最も適切なる要文を抄出せられたのである。是れが引續いて此の誌上に掲載せらるゝ筈である。

此の金光明經は所謂佛法と王法との冥合一致を説かれたものである。一國の政治が佛の正法を根抵として行はるゝに於ては、其の國は必ず榮えて行く、又泰平なる國に於ては必ず正しき佛教が普く行はれるに違ひない。佛法が王法を助け、王法が佛法を助け、斯くして其の國民は永く其の慶を受くるのである是れが理想の國である。此の事が金光明經の中に委しく説かれてある。金光明といふのは佛の徳のことである。佛の徳は精金の如くに貴いもので、其の光明はあたりを照すのである。此の貴い佛の徳の現はれたのが即ち大乘の教である。故に佛の大乗の教を根抵として一國の政治の大方針を定むるならば、其の國は必ず他の國々をも指導して行けるやうな、最も優れた國になるに違ひない。此の教訓は殊に現代の吾等に適切であると考へなければならぬ。

されば此の經は天台大師も大に之を重んじて『金光明經玄義』及び『金光明經文句』を作られた。また傳教大師は此の經を仁王經及び法華經と併せて『鎮護國家の三部經』と名けられた。寂山に於ては此の三部經が常に讀誦せられ、又講説せられて居たのである。今や國家は多事多端である。自分は此の要文が普く世間の方々に精讀せられんことを切望してやまぬ者である。

謹 告

本月は本多日生師第七周年忌祥月に相當致候に付同人發起し左記の通り記念會を開催仕り追憶謝恩に擬し度候間御誘合せ御來會相成度此段謹告仕候也

左記

一、月 日 三月十四日(日曜)
一、場 所 麴町區有樂町 蟻絲會館(省線一有樂町驛)
一、行 事
柴三笠山馬龜本石井 多橋村 熊太
田吉川田田岡 武顯日三行豊日
治隆堂良啓二郎甫咸

望清佐山上田堀岩井 發
月水藤田田中内野上
日龍英辰智良直日
謙山郎二卯學平英光

人(いろは順)
鈴柴佐小野高富市井
木田藤林澤島川原上
日一阜一悌平三
雄能藏郎吾郎快求純

釋佐姉山中小磯井 笠部上
藤崎川川原浦一
梅正智日長
誓郎治應史生事次

下木酒山中織林井 上
村村井根村原道
壽日日日賴延三
一保慎東衛行郎

事務取扱所

小石川區音羽町六丁目統一

電話牛込五三三六番

大藏經要義續篇

金光明最勝王經(其二)

故本多日生譜

往年本多上人が空前の一大誓願を以て、大藏經要義を隔月に刊行され、斯界の驚異讚歎の標となつたが、好事魔多く、其第十一卷に達した時、梶木日種師の遷化に依り一頓挫を來たし、遂に數年を徒費されてしまった。偶々不思議といへば不思議であるが、因縁の熟する處か、大正十五年の夏頃より微力ながら此の梵業に從事する機會を與へられ、歡んだのも東の間、昭和六年の春、寔に悲しき日が來た。

此の數年間、日生上人の摘出された經典は一百七十六經、二千枚の遺稿に及んで居る。併し夫等に對して未だ上人自ら註釋が附せられてない、何故かならば、經典を先づ全部摘出して其の總量を見、然る後之を七卷に纏め上ぐるやうに註釋を加減して初期計劃通り十八卷にせんとの御豫定であつたからである。四五年でこれだけの經文は、已前とは比較にならぬ程遅々たる次第なのは一つに御健康上と、他面それ程よい經典のなかつた事に歸すと謂つてよからう。或る者は註釋が無ければ價値がないやうにいふが、又それ程世間に知られてないものは必要もあるまいといふが、既に日蓮主義の立場から摘出された經文であるから、どんな經典でも心してこれを拜讀する時には自ら會通せらるべきことを確信し、且つこれを此儘に放擲することは、恩師に對して、又以前の大藏經要義刊行會員に對して、更に遠く佛祖三寶に對して相濟まぬことを想ひ、爰に關係者各位に諸つた結果、特に小林一郎先生の甚大なる御力添の上に、今回日生上人第七周忌記念事業の一として本月より適當に統一誌上に連載し、以て恩師の宿願を成就せしめんと發起する次第である。幸に各位の御清援を仰ぐと云爾。

昭和十二年春 日生上人第七周忌祥月に際して

磯 部 満 事

金光明最勝王經

第九卷の一

大唐三藏沙門義淨奉 制譯

序品第一

是の如く我れ聞きき、一時、薄伽梵王舍城鷲峯山の頂に在しき。最清淨なる甚深の法界、諸佛の境、如來所居に於て、大苾芻衆九萬八千人と與なり。皆是れ阿羅漢にして、能善く調伏すること大象王の如し。

復た、菩薩摩訶薩、百千萬億人有つて俱なり。大威德有ること大龍王の如し。大衆悉く皆雲集せり。佛足を頂禮し、右に遡ること三市^{さう}し、退いて一面に坐せり。

爾の時に、薄伽梵、日の晡^ほ時に於て定^{じやう}より起つて、大衆を觀察して、頬を說いて曰はく、
金光明妙法は
甚深にして聞くを得べきこと難し
諸佛の境界なり
我れ當に大衆の爲めに
是の如き經を宣説すべし

薄伽梵とは佛世尊のこと
大苾芻衆とは比丘のこと
阿羅漢とは小乘の悟を極めた位。
定とは禪定三昧。

如來壽量品第二

八(2)

爾の時に、王舍大城に、一菩薩摩訶薩有り。名けて妙幢と曰ふ。獨り靜處に於て、是の思惟を作さく、何の因縁を以てか釋迦牟尼如來は、壽命短促なること唯だ八十年なる。是の念を作す時、佛の威力を以て、其室忽然として廣博嚴淨せり。

蓮華上に於て、四如來有り。東方は不動、南方は寶相、西方は無量壽、北方は天鼓音なり。是の四如來、各其の座に於て加趺して坐す。

爾の時に、四佛、妙幢菩薩に告げて言はく、善男子、汝今、如來の壽命の長短を思付すべからず。

爾の時に、四佛、大衆の中に於て、釋迦牟尼如來所有の壽量を顯さんと欲して、頌を説いて曰く。

一切諸の海水は

其の滯數を知る可し

釋迦の壽量は

能く數へ知るもの有ること無し

諸の妙高山を拆き

芥の如き數を知る可きも

加趺とは踵を重ねる即ち兩足背を左右の壁上に置く、これ佛陀の坐法なり。

釋迦の壽量は

能く數へ知るものあること無し
其の塵數を知る可きも

釋迦の壽量は

能く數へ知るもの有ること無し

假使ひ虛空を量り

邊際を盡し得べきも

釋迦の壽量は

能く度り知るもの有ること無し

若し人億劫に住して

力を盡して常に算數せんも

亦復た世尊の壽量は

知ること能はず

妙幢汝當に知るべし

疑惑を起すべからず

最勝壽は無量にして

能く數を知る者莫し

爾の時に、妙幢菩薩、四如來の 釋迦牟尼佛の壽量限り無きを説きたまふを聞いて白して言さく、世尊云何が、如來は是の如き短促の壽量を示現したまふ。

時に 四世尊 妙幢菩薩に告げて言はく、善男子 彼の釋迦牟尼佛は五濁の世に於て出現の時、人壽百年、性を稟くる下劣、善根微薄にして、復た信解無し。此の諸の衆生多く我見有り。

如來は、衆生をして涅槃を見せしめ已つて、難遭の想、憂苦等の想を生じ、佛世尊の所説の經教に於て、速かに當に受持し讀誦し通利し、人の爲めに解説して謗毀を生ぜざらしめんと欲す。是の故に、如來は斯の短壽を現じたまふ。

諸佛如來、世に出現したまふは、烏曇跋華の時に乃し一たび現するが如し。彼の諸の衆生は希有の心を發し、難遭の想を起して、若し如來に遇はゞ、心に敬信を生じ、正法を説かるゝを聞いては實語の想を生じ、所有の經典を悉く皆受持して、毀謗を生ぜざらん。善男子、是の因縁を以て、彼の佛世尊は久しく世に住せずして、速に涅槃に入る。善男子、是の諸の如來は、是の如き等の善巧方便を以て、衆生を成就したまふ。爾の時に、四佛、是の語を説き已つて忽然と現ぜず。

爾の時に、妙幢菩薩摩訶薩、俱に共に鷲峯山中の釋迦牟尼如來正徳知の所に往詣し、佛足を頂禮して一面に在つて立つ。

爾の時に、世尊、頬を説いて曰はく

我れ常に鷲山に在つて 此の經實を宣説す

衆生を成就せんが故に

般涅槃を示現す

鳥曇跋華はうどんばら花のこと、三千年に一度現すといふ瑞應。

〉凡夫は邪見を起して 我が所説を信ぜず

彼を成就せんが爲の故に

般涅槃を示現す

羅怙羅とはラゴラ即ち
佛陀の御子なり。

時に、憍陳如、白して言さく、世尊よ、若し實に、如來は諸の衆生に於て大慈悲を有し、憐愍利益して安樂を得せしむること、猶ほ父母の如く餘の等しき者無く、能く世間の興に歸依處と作ること淨滿の月の如く、大智慧を以て能く照明を爲すこと、日の初めて出づるが如く、普く衆生を觀じて愛するに偏黨なきこと羅怙羅の如し。

爾の時に、佛、妙幢菩薩及び諸の大衆に告げたまはく、其れ十法ありて能く如來應正等覺の眞實の理趣を解し、究竟大涅槃有りと説く。云何が十と爲す、一には諸佛如來は、究竟して諸の煩惱障、所知障を斷盡するが故に名けて涅槃と爲す。二には諸佛如來は善能く有情の無性及び法の無性を解了するが故に名けて涅槃と爲す。三には能く身依及び法依を轉するが故に名けて涅槃と爲す。四には諸の有情に於て任運に化の因縁を休息するが故に名けて涅槃と爲す。五には眞實にして差別の相無く平等の法身なるを證得するが故に名けて涅槃と爲す。六には生死及び涅槃二性無きを了知するが故に名けて涅槃と爲す。七に

は一切の法に於て其の根本を了し清淨を證するが故に名けて涅槃と爲す。八には一切の法に於て生無く滅無く善く修行するが故に名けて涅槃と爲す。九には眞如法界は實際平等にして正智を得るが故に名けて涅槃と爲す。十には諸法の性及び涅槃の性に於て差別無きを得るが故に名けて涅槃と爲す。是れを十法に涅槃有りと説くと謂ふ。

復た次に善男子、煩惱隨惑は皆是れ客塵にして、法性は是れ主なり、來無く去無く、佛は了知するが故に名けて涅槃と爲す。

金光明最勝王經第二

分別三身品第三

爾の時に、虛空藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊よ云何が菩薩摩訶薩は諸の如來の甚深の秘密に於て、如法に修行するや。佛の言はく、善男子、諦かに聽け、諦かに聽き善く之を思念せよ、吾れ當に汝が爲めに分別して解説すべし。

阿含の人身觀（中之三）

故大僧正 本 多 日 生

そこで人間の本性に關する阿含の教をハツキリ一つ證明して置きたいと思ふ。それは増一阿含經に

この衆生の根原は度し易し

と言はれて居る。この根原といふのは今言ふ通り表面は濁つて居るけれども、その根本は清度し易いところの善良な性質を有つて居るといふことである。併し善き教を聽かなければ永遠に心の眼は開かれない善き教に近付けば如何なる人でも心の根原の眼が開かれる。ちょうど達の華が池から生長して行くが如きもので、華は水の中で既に伸びて居るのであるが最初は水に懸れて見えない、それがだん〳〵水面に出て遂に華を開く、併し水の中にあっても水の上に出ても蓮は少しも濁りの水に穢されないものである人間の本當の良き心は如何に煩惱があり、フラン〳〵したやうな精神があつても、永遠に心の本性は穢されない、煩惱にも外界の誘惑にも——それは部分が穢されても心の本質は決して穢されない、洵に淨

きものを有つて居るといふのである。

又別譯雜阿含經の中には斯様に説かれて居る。

猶ほ盛滿なる月の無雲の虛空の中に光明世界を照すに一切皆樂見するが如し、釋迦牟尼世尊は世間の大導師なり、端嚴甚だ殊特にして名聞悉く充滿す、月出づれば白蓮榮へ、日現すれば紅蓮敷く。

お釋迦様はちょうど十五夜の満月が天に出て曇りの無い時に、大勢の人が今夜のお月様は洵に美しいと言つて喜び見るやうに、お釋迦様が世の中に出て人々を教化を垂れられることは、誰もそれに接觸することを喜ばぬ者は無い。さうして月が出づれば白蓮が榮へ、日が現れば紅蓮が敷くが如くに、人々の有つて居るところの心の蓮はこのお釋迦様に依てその華をひらくのである。このお釋迦様が日であり月であるといふことゝ、それに依つて蓮の華がひらくといふこと、この蓮の華といふのは吾々の心の本性を言ふのである。法華經に來つて佛性論としていろ〳〵説かれた事柄もそれは蓮の話であつて、本佛論として現れたのも日と月の話である、日や月の光の如き本佛と、蓮の華の如き佛性との相交るところに即ち蓮華が生長して行く、この思想が法華經に來つて妙法蓮華經といふお經の題目にもなつたと思ふのである。この別譯雜阿含の經文に關しては嘗て姉崎君と語り合つて、實に忘れ難い大事な經文であるナ

これである〳〵と言つて、この月出れば白蓮榮へ日現すれば紅蓮敷くといふ經文に就ては、與に共鳴讃嘆した次第であります。これは阿含を研究する者の忘るべからざることである、法華經の南無妙法蓮華經といふことも、この妙法蓮華は一方には自分の本性であり、同時に日なり月なりの光を受けて榮へるものであるといふことを忘れてはならぬのである。法華宗がたゞお題目を唱へて佛性があると言つて見ても、日なり月なりが無ければ蓮は伸びもせず華も開かぬといふことを忘れては駄目である。然るに今日は法華宗が一般にお釋迦様を忘れて居る。蓮は獨りでに大きくなるものだと思つて居る。日月出でざれば蓮も成長すること能はず、泥の中に腐つてしまはなければならぬものであるといふことを忘れて居る。

この思想は宗教といふものゝ根本原理である、阿含より法華に至り、佛教の一切經を貫くのみならず一切の宗教を貫くところの宗教といふものゝ根本觀念である、これに一致しないやうな思想は俗論であり柄を外れて居るものである。その點に於てこの阿含の教へ方といふものは非常に宜しいと思ふ。

長阿含經の中には、

教を受け易き者は後世の罪を畏れて能く惡法を滅して善道に出生す、譬へば優鉢羅華の或は始めて汙泥より出て、未だ水に至らざる者、或は已に出て、水と平かなる者あ

り或は水を出で、未だ敷開せざる者あり、然れど皆水の爲に染着せられず開敷すべきこと易きが如し、世界の衆生も亦復是の如し。

茲にも蓮のことを細かく述べてある、蓮は水の中で少し伸びてまだ泥から上に出ないものがある。又既に水と同じくらいの所に伸びて居るものもある。或は水より上に出て居るものがある、或は未だ華を開かぬものがある、けれども而も孰れもその泥水に染着せられずして、それが穢すことも汚すことも出来ない、さうして結局は美しい華を開くのである。一切衆生亦斯の如きもので、如何なる罪惡であるとか如何なる漏りがあるても、その泥の中にこの本性の眼覺めたるものが發育をして行くならば、穢されずして遂に華を開いてしまふ、そこに非常な強き信念がある譯である。私は斯の如き阿含の經文に於て小乘が決して消極的でないといふことを明かに認めるものである。伸びたるものも伸びないものも有るが、終ひには必ず華を開く、何處に在つても穢されないといふことは、實にこの增一阿含、別譯雜阿含、長阿含、三つの經文が皆な一致して居る、阿含の諸經に於てこの思想は貫して居るものであると言つて宜しい譯である。

尙ほ又お經ばかりでなくその當時に小乗の學者が論を立て、居つた中に、やはりこの問題は明瞭にされて居つたと思ふのである。それは異部宗輪論といふ小乗の學者の論争を書いた大事な書物で、極く早

い頃に小乘阿含を弘める人達の間に論議せられた意見の相違を書き記したものであるが、その中に斯ういふことが書かれて居る。

心性本淨なり、客隨煩惱に雜染せらるゝを説いて不淨と爲す。

即ち心の本性といふものはもとから淨いものである、心の本質は非常に立派なものであるが客隨煩惱—客隨といふのは本性に對する言葉で、心の本性を主人と見たのである、煩惱はお客様であり居候である。隨は隨伴と言つてお伴である、即ち心の主人たる本性は非常に淨いものであるが、煩惱といふいろ／＼な間違つた考はその居候の如くお伴の如きものであつて、それが心の本性を侵してそれをごま化したり紛らかしたり、雜染といふことをやるに依つて心に不淨の色が現れて來るのである。居候がのさばるが爲に家中が穢なくなつて居るのである。主人は綺麗好きで、主人だけならばちゃんと一絲亂れず整頓して居る筈である。然るに家中が非常に穢い、あの部屋へ行つても浴衣が脱いである。この部屋へ行つても紙屑が散らかしてあるといふやうなのは、それは居候の女房といふやうなものがだらしなくやつて居るのであつて、その家の主人なり奥さんなりは非常な綺麗好きである。斯ういふ風な事を説いて居る、心の本性は清淨なるものであるが客隨煩惱に穢されるが故に不淨である、心の悪い奴は居候であるとハツキリ説かれて居る。斯の如く小乘は皆人の本性を罪惡として説いたものではない、業感としてのみ説いたものではない、本性は清淨であるけれども、居候でありお伴である煩惱の爲に穢されて居る

といふ、この煩惱罪惡を客隨であると説くことが小乗の教にあると言つたならば、今までの日本大乘佛教家の小乘に對する議論ナンといふものは一遍に壊れてしまふものである。大乘佛教でもこれ以上に出ることは出來ない、寧ろこれだけの事もハツリキさして居ないくらいのものである。即ち淨土宗や真宗に行けば、たゞ悪い事をして罪があるとか、地獄は一定、足を鬼にひつ張られるとか、そんなことばかり言つて居る、そんなものは駄目である。この本性清淨なりといふことが、本當の教を成すのであつて法華經の教から言つても、一切の世界に通じての道德宗教的根本義に於て、これならば誰も一指を添へることは出來ない。人身觀の上に於て、本性は清淨なり、客隨煩惱に雜染せられるが故に不淨と爲すと言つたならば、誰も反對することは出來ない、「大きにさうだ」といふことになる。そこに人間として非常な悦びがあり又警戒をしなければならぬといふことが起つて来る、ちょうど適當な教訓といふものが成立つ譯である。即ち茲に萬世變らざる教化の根本がその中から生れて來ると思ふので、決して阿含が一時的の教でないといふことが能くわかるのである。

^註 肯この小乘の論書の中に成實論といふ名高い書物がある。その中にもやはりこの問題が論議されて居る。

論者言ふ、有る人は心性本淨なり、客隨を以ての故に不淨なりと説く、又然らずとも説く。

茲には客隨とあつて、隨の字が座といふ字になつて居る、それはやはり同じ意味で、鏡や珠に譬へるな

らば珠は光るけれども座がこれを蔽うて居るといふ方から座といふ字を使ふのである。客隨も客隨も同じ意味である。そこで或る論者は心の本性は淨いものである、客隨の爲に穢されて居るのであると説く又然らずとも説くといふのは、いやさうではない、心の本性にも不淨な所があるのであるといふやうな議論をする者もあるといふのである。その反對論の方だけが小乘の議論だと思つて、大乘の佛教家はやれ業感縁起とか、小乗は人を罪惡に見るとかガヤ／＼ワイ／＼言つたのである。斯様に二つの問題があるがこれを成實論では、

佛は衆生の爲に心の常在を謂ふが故に、客隨に染せらるれば則ち心不淨なりと説き、又佛懈怠の衆生若し心本不淨なりと聞いて性改むべからずと謂はゞ、則ち淨心を發せざるが故に本淨なりと説く佛が人間の心が不淨だと說かれたのは、餘り煩惱に悩まされて居る人間に對しては警戒を強くする爲に人間の心は穢れが多いぞ／＼と説かれるのである。又佛が左様に心が不淨ぢや／＼と説いたならば横着な人間があつて、不淨なればモウ仕方がないといふので、ちょうど今時代の僞はらざる告白とか、自然主義とかいふやうな具合に、人間といふものはもとから性の悪い者だ、彼れ此れ言つたところが駄目だ、そんな者は僞つて居るのである、僞はらざる所は、人間は食つたり飲んだり寝轉びたいといふのが本性だといふやうなことを言ひ出すことになつては大變だから、さういふ人間の心の不淨は改めることができぬなどと言ふ者の爲には、もと／＼人の心は清淨なものぢやと説いて彼等の迷ひを醒ますのである

斯様にして阿含の教は假に人の心が不淨なりと説かれて居つても、それは衆生教化の方法に過ぎない、根本の眞理としての説明は何處までも人間の心は本性清淨なりといふ立場にあつたことが能くわかるのである。

然るにこの議論の一方の心不淨と説かれるのは、人間が自分の心の本性は不淨なりと言はれることに依つて教化を受け得る者がある。人間といふものは油斷すればもと／＼心は穢れて居るのだからと言つて、驚いて自ら諱める、さういふ人は澤山ある。基督教などに於ては悔ひ改めよ、罪の人であると言ふし、淨土宗真宗に於ても地獄は一定、鬼が足をひつ張つて居ると言ふ。さういふ風に人間の穢れの方を説くことに於て驚かして、ハツと思はして、さうして善心に導くことと出来る者の爲にはさういふ説き方もするといふのである。併ながらそれは寧ろ手段であつて、人間の本性は永久に淨いものである、それは本淨といふ言葉、客隨といふ言葉に依つて明らかにわかるので、人間の心の淨い方が根本であつて穢れる方は附け足りである、塵の爲に鏡が曇つて居るが、その塵を拂へば鏡はもと／＼光つて居る、茲に教が立てられて居るのである。(次續)

開目鈔講話

(第六講)

小林一郎

但し此の經に二箇の大事あり。

法華經といふものが二十八品あるけれども、その中に於て最も大切な事が二つある。その二つといふものは、法華經二十八品といふものが大體二つに分けることが出来る。その前の十四品は「迹門」であつて、後の十四門は「本門」である。前の十四品に於ては、お釋迦様がまだ永遠の生命を有つて居る本佛の假に人間界に現れたものだといふことを打明けて居らない。即ちお釋迦様は出家をして、修業をして覺つて、教を説いて、然るべき時が来れば入滅して

しまはれる方だといふやうにして説いてある。それから本門に至つて、壽量品を中心として、お釋迦様は永遠の生命を有つて居る佛がこの世に現れてゐらつしやるものだといふことを説く譯であります。ですから法華經そのものが自ら二つの大きな區分けを有つて居る譯であります。

そこでその兩方にそれ／＼中心となる思想がなければならぬ。迹門の方ではどういふ思想が中心となつて居るかと言へば、それはお釋迦様の御一代の説法は何の爲の説法かといふことを明かにすることこれが前の迹門の主な目的である。佛様が世の中に

出て教を説くのに、殆ど五十年の間種々さまざまくな
教を説かれたのであるが、その教を説くといふことは一體何の爲だつたかといふことを明かにする。それは「一大事因縁」と方便品にあるのがそれでありまして、即ち一切の人間をだん／＼と教へ導いて、佛様御自身と少しも變らないものにしてやらうといふことが、佛の世に出て教を説かれる目的である。

斯ういふことであります、勿論現在の所で言へば、善人も惡人もあるし、賢い者も愚な者もあり、人々は千差萬別だけれども、何れも佛と成るべきところの本性は、自ら具へて居るのであるから、その本性が十分に發揮される時は、それは速い遲いの違ひはあるだらうけれども、何れは佛に成るに違ひないのだから、その本性を發揮させる爲に教といふものを説く。その教の中に方便の教といふものもあり、眞實の教といふものもあるけれども、方便の教といふものは眞實の教に續くものであつて、方便の教は

方便だけで終るのでなくして、結局は皆がだん／＼と修行を積んで佛の境界に到達するといふこと、これが佛教を修行する者の理想でなければならず、又佛が教を説きになるのもその爲にお説きになつたのだ。斯ういふ事が達門、即ち前半分の方で明かされて居る。その説法の中心となるものが方便品である。

ところがそれには又これがお釋迦様お一人のお考でないといふことも併せて考へなければならない譯です。お釋迦様お一人のお考がさうであつても、世界といふものは吾々の住んで居るこの娑婆世界だけが世界ではない。世界は限りなく廣いものである又時代も吾々の時代だけではない。遠い昔から遠い未来の世まで續くものであるのだから、若しそのお釋迦様のお仰しやることが他の佛様のお心持と違ふならば、お釋迦様一人が皆を佛にしてやらうと言つて教を説いても、それは徹底しないかも知れない。

とだ。これが達門の方の一番大事で、法華經に二回の大事があるといふ中のその一つであります。

それだから佛様はどんな低い教をお説きになる時でも、そのつもりで説いて居らつしやる非常に卑近な事をお説きになる時でも、お心の中では、斯ういふ卑近な事を手懸りとして、これからだん／＼深い所まで教へて行つて、結局佛の境界に到達させてやらう、斯う思つて説いて居る。それが本當の絶対の慈悲である。『彼奴はつまらぬ奴だからいゝ加減に教へて置く』とか『此奴は惡人だから相手にならぬ』といふのではない。如何なる人間に對して如何なる教を説かれる時でも、必ずこの人間を佛にしてやる、途中で止めはしない。だん／＼深入りさして佛の境界に到達させてやらう。斯ういふことを理想とし、又そのつもりで、さういふ見込を立てゝ教を説いて居らつしやる。斯ういふのであります。これ

が非常に大事な事であります。

これが達門の方の一番大事な事である。有ゆる佛様が皆同じ心持を有つて居る。その同じ心持とは何だと言へば、お釋迦様が、今申すやうに大勢の生命の有る者を皆佛にしてやるといふこと、斯ういふこ

我々が佛教を學ぶに就いては、その點をしつかりと捉まへなければならぬ譯です。何しに吾々は佛様を拜むのだ、何しにお經を讀むのだと言へば、それは吾々自身が佛に成る爲に信心をするのだ。吾々自身が佛に成るといふことはどういふ事かと言へば、一足飛びに佛には成らぬけれども、佛様に近いやうなものになる、今は凡夫で低い處に居るこの自分が、だん／＼向上して行く。さうして少し上つて来ればもとの低い處に居る他の者を引張つてやる力が出来る。他の者を自分が引張つて引上げてやる。それから又の次に自分が向上してモウ少し上つて来ればもとの者を又引張つてやることが出来る。斯ういふ風に自分が一人佛に成るといふことは、自分一人佛に成るのであつて、自分がだん／＼智慧が進み、だん／＼徳が高くなれば自ら周囲の人を感化して他の者を皆引張つてやれるのですから、吾吾が佛に成るといふことは決して自分一人のことです。

はない、有ゆる人間を教ふことである、己れが佛に成るといふことは、又他の人を佛にすることである。自分一人がモウすつかり迷ひを離れ盡してしまつて、それだけではそんなに大して尊いことはないだらうけれども、自分の智慧が進むに従つて自ら他人を感化することが出来るといふのだから、皆があ互に助けたり助けられたり、教へたり教へられたりして皆ズン／＼進んで行つて、結局は皆佛の境界まで到達することが出来やう、斯ういふ譯でせうそれを目當にして吾々が信心をするから、自分の爲といふことと人の爲といふことと同じことです。自他の區別といふものがない。自分を完全にしさへすれば人を善くすることが出来るのだし、又人を善くしたいと思へば自分がぼんくらで、人を善くすることは出来ないから、自分の修養を積んで行きますから、自分の爲といふことと人の爲といふことはそこ

に區別は無い。その考を以て吾々は修行する、その考を以て世の中に立てば、「人はどうでも俺さへ宜ければ……」といふ考は無くなつて行く譯です。人の爲と自分の爲と同じナンだから、通じて一つナ。ンだから、ちょうど母親が赤ん坊に乳を呉れるやうなもので、子供が乳を飲んで喜んで居ればお母さんも喜ぶ、子供に乳を飲まして「一時間飲ましたから報酬を幾ら取る……」といふ譯ではない。向ふが喜ぶことが自分の喜びである。自他といふものの境はない。さういふ教を世の中に弘めて行つて、皆がその心持になりさへすれば、世間の煩はしい争ひナンといふものはありはしない、階級鬭争もなければ國際の紛議も無い。さういふ心持が本當に徹底すれば皆があ互に喜んで平和の生活に這入れるでせう。その事はモウ既に述門に於て明かにされて居ります。これが二つの大事といふ中の一つの大事であります。

それから今度は本門の方に来て大事といふのはどんな事かと言へば、今の問題をモウ少し深く考へる何故十方の世界の佛の言ふ事が同じであるのか、遂門の方に於てはたゞそれだけを打明けられて、この一切の人間が佛に成る爲に教を説く、而もその一切の人間を佛にするといふことは、釋迦牟尼佛御一人の考ではなくて、有ゆる佛のお考であるといふ所までを言つたのであるが、今度はモウ少し深入りして、どうして十方の世界の佛の考が一つなのであらうか、その原因はどういふ事であるか、又吾々が佛性を具へて居つて、佛に成るやうな性質を具へて居つて、さうして佛の教を聞いて佛と同じやうに成ると言ふ。それは何故成れるのだ、どういふ理由があるから成れるのだらう。斯ういふことになつて来る。さうするとそれは所謂「本佛」といふことをそこに説き現はすことになる。本佛といふ根本の佛様がたゞ一つなのだ、その佛様の力が現れてお釋

迦様の説法ともなれば、何々佛の説法ともなるのである。だから一つの佛様の現れたさま／＼な佛様であるから、その澤山の佛様のあ説きになることが一致して居るといふことに不思議はない。根本が一つ致して居るといふことに不思議はない。根本が一つ佛様に成つたとすれば、その説かれた事が一致するなんだから、根本の一つの佛様が現れていろ／＼な佛様に成つたとすれば、その説かれた事が一致するのに不思議はない譯です。

それから又吾々自身が佛性、佛と成るやうな性質を具へて居るといふのも、その佛の力が自ら吾々の心中に現れるから、さういふ佛性を具へて居るのだ。斯ういふ風に考へられる。さうすると吾々自身が佛と成る性質を具へて居るのも、本佛の力のあ蔭だし、又説法する爲に佛が出て行らつしやつたのもこの本佛の力の現れだとすれば、もと／＼どつちも同じ所から來たのだから、この佛の教を聞いて吾々自身がこれを信じさへすれば、もと／＼出所は同じ力が、佛様の教ともなれば、吾々の本心とも

なつて居るとすれば、これが一致するといふことは當然のことである。少しも不思議は無いことである斯うなつて來まして初めて私共は本當に一生懸命になつて信心をする氣に成れるのです。これは疑の無いことであります。信心をして救はれるか救はれないかといふことに聊かでも疑念を懷いてはならぬのであります。さういふ事を考へますれば最早や疑念は無くなる譯です。

たゞ茲にモウ一つ考へなければならぬことは、根本の本佛が現れていろ／＼な佛様に成つたのだといふならば、何もお釋迦様だけ有難がらなくとも宜いではないかいろ／＼な佛様が有難いならどの佛様を信じても宜いぢやないか、斯ういふ又一種の問題が起つて来る。そこはこの婆娑世界に居る吾々人間の立場から考へなければならぬ。吾々は婆娑世界に居る人間ナンだから、この婆娑世界に居る吾々人間を救ふが爲に、この本佛が特に釋迦牟尼佛といふもの

になつて吾々の婆娑世界に現れて教をお説き下さつたといふことが、婆娑世界の吾々としては一番有難い。他の佛様も有難いだらうけれども、それは吾々と別の世界のことである。吾々の住んで居る釋迦世界に本佛が釋迦牟尼佛といふものとなつて現れて、この婆娑世界の吾々の住んで居る國土の上に於て、教を説いて吾々を救うて下さるといふことは、此處に住んで居る私共としては何より有難いことで、釋迦牟尼佛といふものと他の佛様と同じに考へるといふことは出来ない。それは佛と成れば、佛の智慧とか佛の慈悲といふものは固より同じだらうけれども特に婆娑世界の吾等を教へ爲に出来られた釋迦牟尼佛といふものが、此處に住んで居る吾々としては一番思の深い佛様である。こんな有難いものはない。だから釋迦牟尼佛を差措いて他の佛を拜むといふことは、それは筋道が違ふ。斯ういふのが日蓮上人の生涯の理想である。何も釋迦牟尼佛だけが特別に優秀

娑婆世界に釋迦牟尼佛として現れて下さつたといふことこのことを明かにすることが、法華經を讀む上に於ては非常に大事な事であります。

さういふやうな所から天台大師の言ふ一念三千といふ、この前言つたやうな個人銘々の心にいろ／＼違ひがあるけれども、この佛の教を信じて行けば自分達も必ず佛に成れるといふ、この間お話をしたやうな事はこれはモウ疑ふ所なく信ぜられる筈ナンであります。

これをこの經の二つの大事と申して居る。

俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗等は名をもしらず。華嚴宗と真言宗との二宗は、偷に盜て自宗の骨目とせり、

そこで今申したやうな事は、日本國に渡つたところの俱舍宗、成實宗、律宗、これは奈良時代の末に渡つた小乘の佛教であります。それから法相宗、三

論宗、これは奈良の時代に渡つた大乗の佛教であります。が、さういふやうな宗では名も知りはしない。それ等の宗に於ては唯一絶對の佛ナンといふことを殆ど言はないのでありますから、そんな宗旨では此の大事な事に就て名前を知ることさへ出來ない。これはまるで段が違ふ。

それから華嚴宗と真言宗の二つの宗は、これは今までその事をあるし、真言宗の方では大日如來といふものを尊びまして、大日如來が唯一の絶對の佛だといふことを言ふのですから、この二つの宗は法華經で言ふ所と似て居る。けれども、その華嚴經なり大日經なりを説明して皆に納得の行くやうにする場合に於ては、これは主に支那の唐の時代にやつたのであります。が、その説明をする人が偷に天台大師の言つた法華經中心の説明を「盜んだ」といふのはそれを自分のものにして、眞似をして説明をし、言

の文の底にしづめたり。龍樹、天親、知てしかもいまだひろひいださず。但我天台智者のみこれをいだけり。

葉を入れ換へて自分の宗旨の一番大事なものにして居る。これは何れも支那の唐の時代であります。天台大師は陳より隋の時代で唐より前です。その天台大師の法華經を中心にしてお説きになりましたことが、如何にも深いものであつて、又能く整頓した道理の立つたものですから、それで唐の時代になつて現れて來たところの真言宗とか或は華嚴經とかいふものを弘める人々は、この天台の教を能く研究してそれをソツと應用して自分達の尊ぶところの華嚴經の説明をしたり、或は大日經の説明をしたりして居るのであります。これはモウ兩方の學説を比べ合せて見ると、天台に基いて居るといふことは直ぐに解ることナンです。それを言つて居ります。真言宗とか華嚴宗とかいふやうな宗では、偷に天台の説を盗つて、自分の宗の説明をして居る。

一念三千の法門は、但法華經の本門壽量品

それだから華嚴や真言の方で言ふ事と天台の教とは大變似て居るやうですけれども、一念三千といふやうな點に於ては非常に違ふのである。一念三千とは前に申したやうに、自分の心の中に佛に成る性質もあれば地獄に墮ちる性質もある。又自分ばかりではなく、周囲の國土、人間以外のものの中にもその佛に成るところの尊い性質が具つて居つて、凡そ世の中に存在するものの總てがこの佛の教に依つて救はれて、護られて完全なものになるといふことが、この間申した一念三千といふことの大事な點であります。が、さういふ考といふものは他の經を讀んでもそこまでは行けないのであって、法華經の壽量品の中にさういふ意味が含まれて居るのだ。それは壽

量品の全體を讀んで見て、一念三千ナンといふ言葉は出て來はしない。一切の人間が佛に成るナンといふことは書いてないけれども、それは壽量品の文章の上には無いが、壽量品を能く讀んで見ると、さういふ意味が解つて来る。それは文の底に沈めた、文章の上に現れないで、文章を能く味はつた時に初めて出て來ることである。これを『文底秘沈』と申すのであります。

これは經典を讀む時はいつでも考へなければならぬので、文章を讀んでその意味が解つたら、それで解つたといふものではない、その言葉に言ひ現せないモツと深いものがあるから、それは能く文を讀むことに依つて自分で捉まへるより外ない譯です。だから同じ壽量品を讀んでも、たゞ壽量品の本文だけ讀んでも、たゞ字の講釋が解つただけでは、佛の絶對の大悲といふものは解りはしない。天台大師の如くに本當に魂を打込んで法華經を読みまして、

印度では大乘佛教を弘めるのに、龍樹といふやうな人、天親といふやうな人が出て、これ等の人の力に依つて大乘の佛教といふものが非常に盛になつて来たが、その龍樹とか天親といふ人は無論頭腦の良い人で徳の高い人でありますから、佛様の御本意は能く知つて居つたらう。けれども自分の心で知つて居るだけで『ひろひいださず』斯ういふ事を持ち出しう大勢の人々に説き弘めるといふことはしなかつた。それは時機に依るのである。これは日蓮上人の他の御書の中にもありますが、教といふものは時機に依る。皆が本當に求めて居る心持の無い時に、幾ら高

尚な教を說いたところが、それは非常に頭腦の良い人は別であります。一般の人間は受けるものではない。だから説くべき時が來なければ、幾ら深く覺つても自分の心に納めて置いてこれを説かない。ところがだん／＼世が末になつて參りまして、所謂末法の世になつて、世間が險惡になつて、世の中の争ひが多くなつて、面倒が多くなつて來るといふと、大多數の人はだん／＼悪くなつて行く。今の世の中などはさうです。モウ遠慮會釋が無くなつて来る。罪を犯すナンといふことは平氣になつてしまふ世の中が少し穏かな時には、泥棒をして捕まれば恥かしいくらゐの顔をするけれども、この頃は泥棒をして捕まつたつて恥かしい顔もしはしない。『こんな暮しの出來ない世の中で泥棒する』のは當然だ、何が悪いのだ』といふやうなことになつて來る。世が末になつて來るとどうもやはり人間の心といふものは險惡になつて、悪い事をして謝るのではなくて、悪い事

い事をして却つて感張つて居る『悪い事をさせるやうな世の中がいけないぢやないか』といふやうな譯であつて、大感張で罪を犯すといふくらゐになる。それが全體ではないでせう。百人の中九十九人まではそんなやうな心持になるか知らぬが、極く僅かな人でも『これではならぬ』と氣の附く人が必ずある。『どうもこんなにしてお互が我意に募つて俺が／＼ばかりやつて、いつでも衝突をして、いつでも面倒を多くしたところが仕方がない。モウ少し何とかして自分達が思ひ直して佛の道を教へなければ、世の中といふものはまるでまつ暗闇になるぢやないか』といふやうに考へる人があるのです。これは少數でせうがあるので斯ういふ人は一心に道を求める、本當にそれでなければ世の中が立ち行かねと思ふから、一生懸命になつて教を求める、このやうな人が續ひ少數でもあれば、斯ういふ人の道を求めることはそれは眞剣ナンでありますから、斯ういふ人が出た

時に初めてそのお釋迦様の本當に魂を籠めた教といふものが弘まる機運が開ける。世の中が割合に無事だといふと、誰も真鍔にならない。いゝ加減で通れるからいゝ加減で通つてしまふ。だんく世の中がいけなくなると、これではならぬと思ふ人は真鍔になる、さういふ人の要求はたゞ傳統的の信心を以て満足しない。「自分の家は法華宗だから何だか知らないが南無妙法蓮華經だ」自分の家は真宗だから何だか判らぬけれども南無阿彌陀佛だ」といふやうなことではない、どれでも宜い。先祖から傳つたものとではない、どれでも宜い。

日本中がこの法華經に歸依するやうになつて来る。又世の中を明るい世の中にするやうな教が有難いのだ。さういふのを求めるよといふのですから末の世に至つて本當に教を求める人の要求といふものは實に真鍔なのです。それはモウ千人の中に一人か、二千人の中に一人か、極く少いでせう。さういふ人の現れた時に、縱ひ少數であらうとも、さう

いふ時代になつた時に初めて法華經のやうな、佛様の本當に魂を打込んでお説きになつた教が世の中に弘まるべきである。初めはそれは少數だらうけれども、併し永い間経てば、三人が五人になり十人になり、百人になるといふやうな風に、さういふ眞面目な信心をする人がだんく殖えて参ると、やがては世の中を動かす力がその中から生み出される、これに依つて末法の世の浅ましい状態がだんく直つて結局は光に満ちた、喜びに満ちた世の中がそこに實現されよう。斯ういふのであります。

日蓮上人などはさういふ者が法華經を弘められた。自分の一代の三十年や五十年にスツカリ日本中が法華經に歸伏する事が出来ないといふ事ぐらゐは知つて居らつしやつた。兎に角自分は願けをするのだ。一生懸命に自分がこの法華經といふものを弘めて見る。さうして志を同じうする人が縱ひ少數でもあるならば、その少數の人が又本になつて、モウ少

し他にも信心を同じうする人をつくつて行く。結局日本中がこの法華經に歸依するやうになつて来る。又日本が中心となつて他の國にも弘まつて行くだらう。斯ういふあつりなのです。それは時代を能く見られたからであつて、昔は龍樹天親といふやうな人も法華經の尊いことを知つて居つたし、佛様の御本意も知つて居つたらうけれども、まだくそれ程世の中が切迫して居ないので、そんな事を説いても人が受けないやうな時代だから『知つてしかもいまだひろひださず』知つては居るがそれを持ち出して世の中に弘めることをしなかつた。斯ういふです。

ところが『但我天台智者のみこれをいだけり』天台智者といふのは、天台大師のことを智者大師とも言ふので、同じ人のことです。天台大師のみがこの事をしつかりと考へて居られた。これは昔の龍樹天親などに比べると時代が後になつまして、だんく

一念三千といふことは、前に詳しく述べましたからこゝでは略しますが、一念三千といふことを言ひ出す根本は十界互具である。佛の境界に行く者も、もとは地獄や餓鬼道に墮ちるやうな淺ましい境界に居たことがある。又現在地獄や餓鬼に墮ちるやうな浅ましい境界の者でも、一たび心が直つて行けば、だんだん修行して佛の境界に行われる。だから十界互具であつて、佛に成るといふのも地獄に墮ちるといふのも、心一つの持ち方で、どつちにも行ける。斯ういふことが十界互具でありまして、その十界互具から進んで一念三千といふものになり、どんな境界

に居つても佛の教を本當の心持を以て信じさへすれば、自分を佛にし人を佛にすることも出来ることも言はれるのであります。

ところが法相宗とか三論宗とかいふやうな宗旨では、無論佛といふことも菩薩といふことも言ふけれども、根本は八つの世界だけの事を考へる八つの世界といふのは前に申した十界の中の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天といふものと、それから聲聞、緣覺といふやうな、極く凡夫の境界と、それから佛の教を聞いて、兎に角世の中に執はれない心持をつくといふやうな、そこ迄は三論宗とか法相宗といふやうな教でも行ける。けれども菩薩の行といふことの本當の所はさういふ宗旨では解らない。何故なら菩薩の行を積むといふことは、佛に成れるといふ目當を附けなければ積めるものではない。菩薩の行といふのは慈悲を以て一切の人に接して、大勢を教へ導くことに骨折るのがそれが菩薩の行でありま

す。その菩薩の行を何故するかと言へば、自分も斯ういふことをやることに依つて、自分の本來有つて居るところの佛性といふものを十分發揮して行きたる。結局佛に成れるのだといふこの目當がハツキリ附いて居つて、そこで初めて所謂菩薩の行といふものが出来る。『何だか知らぬけれども善い事だからやらう』ナンといふやうなことでは、それは困難がなければやれるけれども困難があると途中で腰が砕けてしまふ譯です。それだから一切の衆生が佛に成れるといふ目當が附いて、初めて所謂菩薩の行、世を救ひ人を救ふことが出来るといふのです。ところが三論宗や法相宗では一切の人間が佛に成れるといふ根本を十分に説かないから、さういふ所では佛のことと菩薩のことが十分に解らない。それで十界の中の八つだけ、前の六つは凡夫の境界であります

而を律宗・成實宗等の十方有佛、有佛性なんど申は、佛滅後の人師等の大乗の義を自宗に盜入たるなるべし。

が、その他の二つ、聲聞、緣覺といふやうな世の中の無常を感じて、世の中に執はれないだけの心持をつくるといふ修行は出来るだらうけれども、十界といふことはこれ等の宗旨では解らない。

十界を知らないから、互具と言つて、佛に成れる者にも地獄や餓鬼道に墮ちる性質が潜んで居る。或は地獄や餓鬼道に居る者でも佛に成る本性は具へて居るといふ、さういふ大事な事は三論宗法相宗といふやうなそんな宗旨では解るものではない。これはどうしても法華經を中心として、一切の人間が皆佛に成り得るのだといふその大事な所を捉まへなければ解るものではないといふのです。

俱舍・成實・律宗等は阿含經によれり六界を明めて四界を知らず。十方唯有一佛、一方有佛だにもあかさず。一切有情悉有佛性とこそとかざらめ。一人佛性猶ゆるさず。

俱舍宗、成實宗、律宗ナンといふのは、これは小乗の佛教だから所謂菩薩の行といふことはテンで説かない。これは阿含經といふ經に依つて居る。だから六界は解る。六界は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天といふ所謂凡夫の生活であります。その凡夫の生活の事は阿含經に實に能く説いてある。若し吾々でも何故迷ひといふものが起るか、迷ひといふものの實際はどんなものだらうといふことを詳しく知りたければ、阿含經を讀むが一番宜い。これは凡夫の境界を説いて居る。斯ういふ風にして心の迷ひが起つて来るといふ、凡夫の境界を説いたものです。それだから甚しく瞋恚を發すれば地獄界が出現する

とか、貧慾が甚しくなれば餓鬼道がそこに出現するといふやうなことは、阿含經を讀みますと實に手に取るやうに詳しく述べてある。けれどもその他の聲聞、緣覺、菩薩、佛といふやうな覺つた方の境界のことは阿含經では解らない。それはモツと深入りしたことかは、即ち他の大乘の教に依らなければ、そこらの深い事は本當に解りはしない。であるから六界を明めて四界を知らない。

それだから十方に唯一つの佛が有るといふことが解らない。十方に唯一つの佛がある。即ち前に申した本佛であります。が、その一つの佛が現れて十方の世界のいろ／＼な佛に成つたのだといふ、斯ういふ事、これは法華經以外のものでは能く解らない。それから又一方に皆佛が有る。十方の世界に各々その世界、その世界を救ふべきところの佛が有る。根本の木佛といふものがあつて、その力が無限であつて、現れるのだから、何處の世界にも皆その世界、その世

界を救ふべきところの佛が有るのだといふことは、これは俱舍宗とか成實宗とかいふやうな宗旨では解らない。それ等の事を十分説いてある。その事は知つて居る。お釋迦様が一切衆生に皆佛の性質が有ると仰しやつたぐらゐの事は知つて居るけれども、併し小乗の教だけでやつて居ると、何だか佛様がそんな事を仰しやつたといふだけであつて、何故佛性が具つて居るか、その佛性といふものはどんなものだといふことはチットモ解りはしない。たゞその事は、『涅槃經』といふあ經の中に一切衆生皆佛性があると言つてあるさうだ』ぐらゐの話であつて、それは本當に大乘の教を研究して見ると、皆佛に成る性質を具へて居るといふことは能く解る。それは本當に大乗の方の進んだ教を研究しなければ解らないことな

のです。であるから一人が佛の性質を有つて居るといふことさへ能く解らない。

そんな小乘の教に依つて信仰したところが、その信仰といふものは、さう深いものにはなれない。それだけのに今日に於て律宗、天台宗、成實宗などのいふやうな宗旨で以て十方の世界に皆佛が有るとか、或は一切の人間が皆佛に成る性質を具へて居るナンと言つて居るのは、それは佛が滅くなつた後に教を説いたところの人々が、大乘の研究をして、さうして大乗の經典の意味を自分の方の宗旨の中に取入れて説いて居るのであつて、言ふ事は大乗の趣意である。

チョットこの所は注意をして置いて戴きたいと思ひます。何故なら宗といふものは皆依經といふものがあるので、どのお經に依つて宗旨を立てるのだといふことはきまつて居る。天台宗とか日蓮宗とかいふものは法華經に依つて教を立てる。それから淨土宗とか真宗とかいふものは阿彌陀經とか無量壽經

に依つて教を立てる、皆きまつて居る。それだからその自分の宗旨の根本に立てたお經より以外に出れば、それは自分の宗旨をやめるより外仕方がないのです。その宗の依經よりモツと以外に出ても宜いけれども、依經より以外に出て行くなら自分の宗旨をやめるより仕方がない。例へば淨土宗とか真宗といふ方でだん／＼研究して行つて、極樂淨土は西方にあるのではない、この世で、この土の上で皆佛に成るので、淨土は此土に出来るのだといふ議論をこの頃して居るのです。それは吾々賛成です。さうあるべきです。その代りに西方に往生すると言つてあるそのお經は捨てなければならない譯です。自分の宗旨の本であるところの無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經に於ては、西方に淨土があつてその淨土に往生する、此士では佛に成れない、向ふへ行つて彼土で佛に成ると言つて居るのだから、その經に依つて立てる宗の人が、この娑婆世界の此土の上に極樂淨

土を見るといふなら、それは根本のお經とは離れてしまつて居る譯である。さういふ議論をするなら根本のお經は捨てるが宜い。隨て淨土宗とか真宗とかいふものを捨ててしまふが宜い。それを籍はこつちへ置いておいて、議論は他の議論をして居るといふのは、これは二心の甚しいものであつて、人を欺き自分を欺くことになる。

日蓮上人のお考で總てが法華經に歸着するといふのはそこなのです。幾ら俺の宗は何宗だと言つて居つても、だん／＼世の中の様子を見たり、だんだん信仰を進めて行くと、西の方に極樂があるとか、東の方に佛があるといふことでは納得が出来なくなつて来る。どうしてもこの世界の此土に極樂淨土を實現しなければならぬといふことになる。當分の所は籍は向ふの方に置いておきながらその議論をして居るけれども、だん／＼その議論が盛になつて来れば、それは皆自分の心に責められて他の宗旨といふ

ものはやめて來る。それで結局は皆の考が進みさへすれば、何宗を合併しようの併合しようのと騒がなくとも、佛教といふものは一つになるに相違ない。斯ういふ事を日蓮上人などは見極めて居らつしやる。今私共もさう思ふ。甚だつまらない事を言ふやうだけれども、日蓮上人を祖師にする一派ですら、今十に分れてお互に勢力を争つて居るといふやうな譯で、これを幾ら合併しようかと言つて見たところがそれは利害關係もあれば、いろ／＼面倒な累ひがあつて、それを皆解體して一緒になるといふことは出来ない。況してや淨土宗もあれば、禪宗もあれば、真言宗もあれば、日蓮宗もあるといふものを、皆解體して一つになるといふことはなか／＼出来るものではない、ただ放つて置けば宜い、何宗があつても構ひはしない。たゞ佛の教といふものは一つしかない筈だから、佛の教を本當に明かにして行つて皆の信仰が本當に一致して来れば、何宗といふやうなこの

とは自然に消えてしまふ。それは今急に慌てゝも仕様がない。二三日前もそんな會合があつて、如何にしたならば日蓮宗の十派を統合することが出来るかといふ議論があつたから、私は言つた。それは放つて置けば宜いのだ、吾々があ寺にそんな事を申込まなくて宜い、皆が同じ信仰になりさへすれば、幾つ派があつても結局同じになるのでありますから皆のお互の信仰を眞面目な信仰にして、佛様の御本意に違はないやうにするといふことが第一義であるそれさへ出來れば、自ら派といふものが有つても無くとも同じで、自然にその境といふものは無くなつてしまふ。さう考へるより外ない譯でせう。

それはさういふ事を言ふのは結構だが、さういふ事を言ふなら、小乘の俱舍宗とか成實宗といふ自分の宗を捨てるより外仕方がないのだ。その宗で居る間はその宗の教義の中にはそんな事は無い。だから大乗の方の教義を取り入れてやつただけの話だ。斯ういふのです。

例せば外典・外道等は、佛前の外道は執見あさし。佛後の外道佛教をきゝみて自宗の非をしり、巧の心出現して、佛教を盜取、自宗に入て邪見もつともふかし。附佛教・學佛法成等これなり。

外典は佛教以外の書物ですが、こゝでは主に外典といふのは支那の孔子の教や老子の教を指して居る。小乘の方の宗旨で皆に佛性があるとか、一切の人間が皆佛に成るとかいふやうな事を言ふけれども

は執見あさし』お釋迦様が世の中に出てならない前の婆羅門といふものは、そんなに執著が強くて、何でも自分の宗旨を繁昌さすやうにといふことをそんなに思ひ詰めはしなかつた。相手が無いのだからそんなに騒ぎはしない、平氣で居つた。ところが佛教が出て来ると、佛教といふものは有力なものだから、そこで佛教に對抗して何でも自己的の婆羅門教を盛にしようといふので、所謂執見、執著の心持が盛になつて來た。

ところが『佛後の外道』お釋迦様がこの世に出現して教をお説きになつた後の婆羅門の人々は、佛様の教を見たり聞いたりして、さうして佛様の教に比べれば自分達の教は浅いもので、劣つて居るといふことが解るから、そこで『巧の心出現して』さうかと言つて自分達が婆羅門教をよしてしまつて佛教に降参するといふやうにはなか／＼なりにくい。これは人間といふものは行懸りに執はれ勝のものです。

つて佛教と對抗するやうになつて來た。これは人間の執著心の淺ましい所であります。何處にもそれがある譯であります。

それで佛の教を盜取つて自分の宗旨に入れて『邪見もつともふかし』こじつけて自分の勢力をつくらうといふのだから、どうもこれはいかぬ。だから後の世から批評して『附佛教』の外道、佛教にくつ附いて、佛教と一致するやうなことを説く外道だと言はれた。或は又『學佛法成』佛の教を習つて漸く挿へ上げた婆羅門だといふやうに後世から批評されるそれはどうも據どころない事であつてもと／＼それはこじつけナンです。

く流布する程に、釋教の僧侶破戒のゆへに、或は還俗して家にかへり、或は俗に心をあはせ、儒道の内に釋教を盜入たり。

それから支那の儒教とか道教といふのもさうだ。併しこゝは主に道教のことを言つて居ります。儒教はこの間申したやうにあまり佛教と競争しませぬでした。一番競争の酷かつたのは道教です。それありますから道教の連中が佛教の教義を自分の方に取入れて、こじつけをやる。漢士に佛法のいまだわらない時の儒家道家は、いう／＼として極く浅はかなものであつて、マア子供が暢氣に物を考へるやうに、そんなに物事を深く思ひ詰めるといふこともなかつた。ところが後漢已後に佛教が渡つて、佛教の坊さんが儒者とか或は道士とかいふやうなものと相對して始終議論をする。さうして行くと佛教の方が深いものだからだん／＼佛教が弘まつて来る。

公明正大の心持になつたら、今までの行懸りが悪かつたら、やめて向ふに、降参すれば宜いけれども、それはなか／＼出來ない。こつちがいけないとは知つて居るけれども、向ふに降参するのは嫌だといふことになる、誰でもさういふ事はあり勝で、こじつてしまふ。吾々が子供を相手に話をしてもさうです。子供を相手に話をして居つて、自分の考が間違つた事があつて、子供が反対する。それは間違つたと言ふのは工合が悪いからこじつけてしまふ『お前』の説も一説だがナ……』といふやうなことでござかしてしまふ。人間といふものはどうもそこが執著が強いといふか、洵に行懸りに執はれ易いのですやはりお釋迦様當時もさうで、婆羅門の者が佛教に敵はないと知つて居るが、それなら婆羅門の方が皆降参してしまつて佛門に歸するかといへば、それは嫌だ。だから佛教の教をソツと自分の方に取入れて『ナーニ俺の方でも斯ういふものがある』などと言

さういふ時に佛教の坊さんの中で、佛の戒律が守れない者があつて、それが還俗して俗人になつて家へ歸る。さうするとそれは佛教の事を知つて居る。といつて坊さんになつて戒を守つて居るのは嫌やだ。斯ういふ者が佛教や道教の連中と結託して、さうして佛教の教を取り入れて、佛教で世の中を渡らう、道教で世の中を渡らうとなつて行く。これが随分多いのであります。今日でもさういふ例は幾らもある。「或は俗に心をあらはせ」世俗の人と心を協せて、儒教とか道教とかいふものゝ中にお釋迦様の教を取り入れて、さうして以前に無かつたやうなことをこじつけて説くといふやうなことをやつて居る。

止觀第五に云く、今世多く惡魔の比丘有りて、戒を退き家に還り、駁策を懼畏して、更に尊士に越濟す。復名利を邀めて莊老を誇談し、佛法の義を以て偷んで邪典に安

き、高を押して下に就け、尊を推いて卑に入れ、概して平等ならしむ云々。弘に云く。比丘の身と作りて佛法を破滅す。若し戒を退き家に還るは、衛元嵩等が如し。即ち在家の身を以て佛法を破壊す。此人正教を偷竊して邪典に助添す。押高等とは尊士の心を以て二教の概と爲し、邪正をして等しからしむ。義とし是理なし。曾て佛法に入りて正を偷んで邪を助け、八萬・十二の高を押して五千・二篇の下に就け、用て彼典の邪鄙の教を釋するを推崇入卑と名く等云云。此釋を見るべし、次上の心なり。

天台大師のお書きになりました摩訶止觀といふ書物の第五の中に斯ういふ事がある。今の世に「惡魔の比丘」どうも心の悪い坊さんがあつて、それが「戒

を退いて家に還り」戒を持つといふことは堪へられなくなつた、一體坊さんの生活といふものは随分嚴肅なものでありまして、生臭いものを食べてはいかぬ、夫婦の生活は禁じますし、にほひのある物を食べてはいけないとか、或は嚴重に言ふと物を蓄へてもいけないといふやうなことになつて、戒を守るといふことは随分辛いことなのです。尋常一樣のことでは出來ない。今では戒などはかまはないで居るから樂だけれども、本當に戒を守るといふことは非常に難かしいことです。それだから折角出家して見てもその佛の戒を守るといふことが出來ないので、廢めてしまつて自分の家に還つて還俗した者が随分あられる。さうかと言つて「駁策」といふのは世の中で排斥されること、家に還つて居つても世の中に排斥されて居るのが恐しい。彼奴はもと坊主だつたけれども、堕落して家へ還つたと言つて世間で排斥されるのが恐しい。それだから「道士」といふ老子の教を

弘める者の方に「越濟す」といふのは引越をする。其處へ越してしまふもとは坊主だつたけれども大に悟る所があつて道教をやるのだといふやうなことを言つて實は悟つたのではない墮落したのだけれども、さういふやうな事を言つて道士の方に引越をして、さうして「名利を邀め」世間の名譽とか利益とかいふものを求めて、老子とか莊子とかいふやうな人々の説を頻に大袈裟に言つて、その説明をする場合に、佛法の事をもと／＼知つて居るものだから、佛法の教理を自分の方に取入れて、「偷んで」といふのはソツと自分の方の教義の中に混ぜて間違つたものにしてしまふ。それに混ぜて、佛教でもないし、老子でもなければ莊子でもないといふことになつた。『邪典』といふのは入り混つたもの、譯の判らないもの、さういふものに仕上げてこじつけ説明をして居る。さうして「高を押して下に就け」佛法のやうな高いものを押下げて、それより低い教の方に

混ぜる。又『尊を推いて卑に入れ』尊い教を低い教と一緒にしてしまつて、『概して平等ならしむ』皆似たやうなものにして、佛教でなくとも宜しい、ナーニ佛教でも宜しい、道教でも宜しいといふやうにしてしまふ。日本でもさういふやうなのが多い。どうも佛教が特別に尊いといふことを言はないで、佛教も知つて居るけれども、神道もチツトは知つて居る、イヤ、佛教もチツトは知つて居るといふやうに、ごちや混ぜにして、何だか譯が判らぬ事を言つて、どうせどの教でも人間に泥棒しろ、人殺しをしろと言ふものは無いから、マア大概似たものだといふことで、これでも宜からう、あれでも宜からうと、さう言ふ者がある。それをいゝ加減な事を言つて歌などを詠んで

わけのぼる麓の道は異なれど

同じたかねの月を見るかな

如何にも覺つたやうなことを言ふ。分けのぼる麓の

道は違つても、皆高嶺の月を見れば宜いけれども、高嶺に行ける道は少いのだ。途中で止まつてしまふのでは同じ所に行かれない。それは麓では判らぬ、どの道でも皆絶頂まで登れば宜いけれども、浅い教であれば絶頂まで行けない。絶頂まで行ける教といふものは一つしかありはしない。佛様の眞實の教しかないのだ。餘は麓の道は似たやうだけども、いゝ加減な所に来て行き止まりになつてしまふ。それが解らないで、『麓の道は違つても宜い、同じ高嶺の月を見る』と言ふけれども、麓の道をいい加減にして行けば高嶺に登れない。行き止まりになるか、そこらの藪に迷ひ込んで蚊に刺されるらることで仕様がない。だからどれでも宜いといふものではない。それはどの教でも人間に悪い事をしろと教へはしないけれども、世の中がだん／＼陥りになつて来て問題が多くなつて来ると、どんな問題を持つて來ても解けるやうな深味を有つて居る教

でなければ、總ての人を導くといふことは出来るものではない。極く淺い教であれば今の世の中の活きた問題を解くことは出来ない。さういふのはちょうど麓から登つて絶頂に行かない内に行き止まりになつてしまふ道だ。それでは皆同じ教だといふことは出來ないのであります。そこは餘程考へないとけない。一番善い教を求めなければいけない。さうして有ゆる問題がサク／＼と解決の出来るやうな教を求めて行かなければ、自分を救ふとともに出来なければならない。人を救ふことも出来ない譯であります。それで天台の言つて居る事は支那の昔の事と思つてはいけない。今の世の中でもさういふのが多い。極く淺はかな事を言つて、結局皆同じぢやないかといふやうなことを言つて居るのであります。そんなことで本当に人間の信仰が決定せらるべきものではないのであります。

それから『弘』といふのはこれは唐の妙樂といふ

人が出まして、今の天台の『摩訶止觀』といふものに説明を加へまして、『摩訶止觀弘決』といふ書物をつくりました。これを略して『弘』と言ひます。その中に斯ういふ事がある。『比丘の身と作りて佛法を破滅す』天台大師は、出家した者が戒を守らないで家へ還つて佛法を滅すやうな行ひをしたといふことを書いて居られるが、それは例へて言へば衛元嵩といふのがその類だ。これはマア外國の事だからどうでも宜いのですが、支那の南北朝の時代に後周といふ時代があります。その後周の次が天台大師の出られた隋の時代になるのですが、この後周の時に、初めて出家して後に破戒して道士になつた者に衛元嵩といふ者がある。天台大師より三、四十年前の人です。さういふやうな者が現にある。天台大師はその時代に出られて、衛元嵩の事などを能く知つて居らつしやるからそれを暗に指して斯ういふ事を書いて居られるのだらう。即ち在家の身を以て佛法

を破る。在家の身といふのは、初め出家して還俗してしまつて俗人になつて佛法の妨げをする。さういふ人が正しい教を偷み取つて、道教の説や何かにつつ附けてこじつけて、いゝ加減な教を捨て上げる。さういふ事を天台が言つて居らしやるのだ。

それから又高きを押して下さに就くといふのは、道士が自分の心持で佛法とそれから道教、即ち老子の教とを一緒にして、正も邪も皆等しくしてしまふのだ。『義として是理なし』本當に眞面目に考へたらそんなことはない、佛様の教の方が非常に高いものであつて、それをいゝ加減にして他の教と同じものだと言ふことは、それはこじつけであつて、正しく考へたらさういふ道理は無い。こういふものは曾て佛法の中に入つて正しい教を偷み取つて間違つた教を助けるのだ。『八萬・十二の高を押して』これは佛法で八萬の經卷があると言ふ、又『十三』といふのは十二部經といふことで、も經の體裁が十二ある。

る。十二部經と言ひますのは、これは十二種のお經があるのではない、お經の成立方か十二通りある。それは一々申さなくても宜いのであります、それを十二部經と申します。或は偈を説くとか、或は偈が無いとか、いろ／＼お經の成立する様子がある。だから八萬十二といふのはつまり佛教全體のことです。それから『五千二篇』といふのは、老子の經典が上下二つに分れて居りまして、それが大體五千言の言葉で出来て居るといふので、五千二篇は老子の教のことです。その下に佛教をくつ附けてしまつて、さうして低い教を佛教の高尚な教を以て解釋してこじつける。それを尊きを擧いて卑きに入れたと名けたのである。

斯う妙樂大師が説明をして居る。これは天台の前の言葉を説明をしただけで、釋を能く見ると、上に書いてある摩訶止觀の心持をその儘説明したのであって、別に違つた事を言つて居るのではない。

佛教又かくのごとし、後漢の永平に漢土に佛法わたりて邪典やぶれて内典立。内典に南三・北七の異執をこりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて、佛法二び群類をすくふ。其後法相宗・眞言宗天竺よりわたり、華嚴宗又出來せり。

佛教の方でも又その通り、兎角後の世になるとこじつけをするやうな者が多くなつて来る。後漢の永平年中には佛教が支那に渡つてから、邪典即ち佛教に及ばないところのいろ／＼な教が破れて、内典即ち佛教が立つた。それでその佛教の中に、天台大師の頃までに、南の方に三つの派、北の方に七つの派があつて、南三北七と言ふ。都合十派ある。その十派の者がお互に争ひをして、自分の方の説が一番良いと言つて相争つて居つたのでありますが、それはちょうど蘭や菊の花が互に咲き誇つて居るやうに、十派

の教義が並び立つて、皆自分が良いと言つて誇つて居つた。ところが陳、隨の世に出た智者大師、即ち天台大師に破られて、佛法の教が本當に一切の人間を救ふやうになつた。その後法相宗・眞言宗といふものが天竺より渡つて、それから華嚴宗といふのもだん／＼支那で出来て來た。

此等の宗々の中に、法相宗は一向天台宗に敵を成す宗、宗門水火なり。しかれども玄辨三藏・慈恩大師委細に天台の御釋を見ける程に、自宗の邪見ひるがへるかのゆへに、自宗をばすねども、其心天台に歸伏すと見へたり。

この中に於て法相宗といふのは『一向天台宗に敵を成す』と言つて、法相宗といふものは實際天台の教とは兩立しないのです。法華經を主にする天台の方では『三乘方便、一乘眞實』と言ふ。主に法華經方

便品に基いての説ですが、三乘は幾度も言ふやうに
聲聞、緣覺、菩薩であります。それは修行の程度
が高いも低いも三いろあると言ふ。その三いろある
といふのは佛様の方便で、決して三いろあるべきも
のではない。それは低い方は高い方にに入るべき準備
として説かれて居るので、その低い方の教で満足す
べきものではないから、その下の方の教は上方に
て續くものである。淺いものから深いものに入る
入口である。だからその三つを立てるといふことは
方便である。これはマア佛様が相手に應じてお説き
になつたものである。「一乗眞實」一乗といふのは佛
に成る教、苟も生命のある者ならば、速い遲いは別
だけれども、修行次第で佛と同じものになる、廣大な
慈悲を具へ、廣大な智慧を具へ、一切の者を救ふや
うなものになれるのだといふ、その事が眞實だ。こ
れが本當の事だ斯ういふのが法華經の立場です。
ところが法相宗の方ではこれを遂に言ふので、「二

乘方便『三乗眞實』と言ふ。聲聞とか縁覺とか菩薩とか三つ立てるのがそれが本當であるといふ。これは人間は生れつきで達ふのだから、修行して皆佛に成れるとはきまらない。マア聲聞といふやうな、世の中の無常を感じて世間に執はれないぐらるまでに行ける者もあり、それから縁覺といふやうに、日常の事に思ひ合せて、世間を離れた清淨な心持をつくるといふやうな者もあり、それから又人に依れば大乗の佛教を學んで、所謂菩薩の行を積んで、慈悲を以て一切の人接して、永い間掛れば佛に成れる。斯ういふ者もある。三いろあるのだ。生れつき達ふのだ。極く善い天性を有つて生れ、ば佛にも成れようけれども、生れつきがつまらない者であれば、聲聞か縁覺か、世の中を離れて世間の累ひを受けないくらゐの所で止まるより仕方がない。それが本當だ。斯ういふのが三乗眞實といふことです。されど法華經や何かに何故一切の人間が皆佛に成る

といふことを説いてあるかといふと、それが方便だ。人間生れつきに依つてつまらない者もあるナンと言つた日には、「ヒヨツとして俺はつまらない者かな」と思つて勉強しなくなつてしまふ。それだから皆を勵ます爲に、人間は皆修行次第で佛に成れるぞと言ふ。それは皆を獎勵する爲の一つの方便だ。實はその程度に依つて達ふのだ。だから佛に成るつもりで修行して佛に成れなくても損はない、聲聞か縁覺ぐらゐになつても凡夫で居るより宜いから、マア學校で言へば「皆一番になれるぞ」と言ふやうなもので、一番は一人しかなければども、皆一番になるつもりで勉強すれば落第しないで済まうといふ譯だ。だから學校の先生が皆一番に成れると言ふのと同じで、方便である、皆が佛に成るつもりで勉強すれば、佛には成れずとも、世間の煩惱を離れるくらいになるだらう。そこで方便として皆佛に成れるのだと言ふ、實際は三いろあるのだ、斯ういふのが法

相宗の説です。今でも法相宗の人はさういふ事を言つて居ります。私は先頃法相宗の或る人に會つたところが『私共はマア聲聞ですナ』と言つて澄して居る、別に佛に成らうナンと言はない。『そんなことはない。吾々は法華を信じて居るが、法華の方では皆佛に成れる』と言つたら、エ、あなたはお偉いから佛にでも何にでもおなりなさい。私等は聲聞で宜しうございます』と言つて澄し込んで居る。それは天性に依つて途中で止まる者があるといふ教、斯ういふ教は法華經と兩立しない。だから『敵を成す』さういふ教が成立てば法華經の教といふものは駄目になつてしまふ。又法華經の教のやうに一切が皆佛に成るといふことが本當であれば、こんな教は壊れてしまふから、これは兩方水と火のやうに違ふものである。

それから又法相宗では今の一乘方便三乗眞實といふことをモウ少し擴げて『五性各別』といふことを

それから又法相宗では今の一乘方便三乗眞實といふことをモウ少し擴げて『五性各別』といふことを

言ひます。これは

決定聲聞性
決定緣覺性
決定佛性
不^無定性

前のは三つにして言つたが、モツと詳しく言ふと五つになる「決定聲聞性」といふのは、佛の教を聞いて世の中の無常を感じるといふから今まで行けると生れつきまつた者。それから「決定緣覺性」と聞いて、この世の累ひを受けないやうになるときまつた者は、それから「決定佛性」といふのは、大乗の修行を積んで結局佛に成れるやうな天性を有つて居る者、これは皆生れつきで違ふ。その他に「不定性」といふのがある。これはマアどちらになるか判らない。十分勉強すれば佛にも行くだらうし、途中

で止めれば聲聞か緣覺になる、きまらない。さういふのもある。なか／＼うまく考へてある。それから「無性」といふのは、逆も教などに入れない者、さういふものもあると言ふ。さういふのは仕様がないからマア悪い事をしないやうに、毎日身を慎んで泥棒もしない、人殺しもしないくらいの程度で宜いにして置く。逆も教ナンといふものは学んでも駄目だ。さういふのもある。五いろあると言つて、この五性は各々別であると申します。法相宗の方では頻にそれを言ふのであります。

ですからさういふのと一切の人間が皆菩薩の行を積んで行きさへすれば結局佛に成れるといふことを説くところの法華の教との法華の教を主にした天台の教といふものは敵になる、ちょうど水と火のやうなもので、これは到底兩立しない。その法相宗を弘めたところの玄昇三藏とか、その弟子の慈恩大師一玄昇三藏は唐の太宗の保護を受けて、法相宗を支那

に弘めることに非常に力を盡した人、慈恩は玄昇に續いて法相宗の爲に力を盡した人であります、さういふ人は流石に天台大師の書物が世の中にあるものだから詳しく述べて天台のいろ／＼な經の解釋したものを見て、自分の方の宗旨は間違つて居るといふことに気が附いて、それから自分の宗旨は捨てはしないけれども、心の中では天台の教に歸伏して居つた様子である。これはそれ等の人々の晩年に書いたものを見ますと、天台に歸伏して居る様子が能く見えてるのであります。

華嚴宗と真言宗とは本は權經權宗なり、善無畏三藏、金剛智三藏、天台の一念三千の義を益とりて自宗の肝心とし、其上に印と眞言とを加て超過の心をおこす。其子細を知らぬ學者等は、天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうちをもふ。

それから又華嚴宗、真言宗といふのは、それは權經權宗である。方便の經を本にするところの方便を主にする宗旨である。ところが真言宗の方は、印度から善無畏といふ者と金剛智といふ者が支那に渡つて来て、支那に渡つた後に天台大師の説いた一念三千といふやうなものをだん／＼と自分の方へ取入れて、さうして自分の方の宗旨の本にした。これは併し理由があるので、この善無畏といふ人が支那に来て真言を弘めました時に、その弟子に一行といふ人があつた。これはもと天台宗の坊さんで、なか／＼天台の方に精しかつた。その一行が善無畏の弟子になつて、真言宗の方に入つて、さうして善無畏の命を受けて、真言のあ經を漢譯することに手傳ひをしました。殊に善無畏が大日經の疏といふものを作りました時に、善無畏はもと／＼印度から來た坊さんですから、支那の言葉は出來たけれども、支那の文章は書けない。ちょうど羅什三藏が法華經を譯して口で

言つて他の者に書かしたと同じことで、善無畏が大日經の解釋をつくる時に一行といふ人がそれを書いた。その書く時に、一行はもと天台宗の學問をした者だから、天台の説明をする言葉で書いた。ですから今大日經疏を讀んで見ると非常に似て居る。善無畏が口で説明したものと文章にする時に、一行は天台の使ふ言葉でどん／＼書いた、それと言つて居ります。今こゝに一行の事は出て居りませぬけれども、それと言つて居るのです。天台の教を能く取り入れて、何だか紛らしいやうにして真言の説明をして居る。これはマア卑怯なことだけれども、さういふ譯で、今日讀んで見ると、真言の教といふものは教理としては天台の教とあまり違はない。

その上に真言宗の方では印といふものと真言といふものを加へて、天台宗より自分が上だといふことにして居る。印といふものは手に印を結ぶと言つて、印契或は印相と言つて居ります。これはもと

もと佛様が自分の心の徳を相に現はすものです。手に印を結ぶと言つて、今でも佛像を見ると判りますが、佛様は皆手の指の結び方が違ふ。顔は皆似たもので、或る西洋人が「佛様は皆同じ顔をして居る」と言つたが、成程その通り、三十二相を具へた佛様だからどの佛様も大概顔つきは似て居る。たゞ印が違ふ。手の置き所、指の結び方が違ふ。その佛様の特に何處に力を入れて教をお弘めになるかといふことを現はすのです。例へば大日如來は一方の指を握つて居るとか、阿彌陀様は兩方の指を圓くして居るとか、お釋迦様は片手を膝の上に於て片方の手を擴げて居るとか、いろ／＼違ふ。それは佛様の心の徳を現はす。例へば慈悲を主にするとか、智慧を主にするとか、佛様にそれ／＼の特色がありますから、それを指で現はす。斯ういふことナンです。それで信心をする者が、例へばお釋迦様を信心する者はお釋迦様の像にあるやうな指の結び方をする。阿彌陀

様を信心する人は阿彌陀様の像にあるやうな指の結び方をして、さうして一生懸命に考へると、口で言ふばかりでなく自分の相が佛様に似た相になりますから、自ら佛の心が自分の心に通つて来よう。斯ういふことで、これが印を結ぶといふことです。それから真言といふのは口に唱へる。一體真言とは眞實の言葉といふことで、佛様の仰しやることは皆眞言でありますけれども、真言宗に於ては特に佛のお徳を讃美稱へて、さうして佛様と一致するやうなお願をすることを短い言葉で言ふのです。これを真言と言ふこれは梵語で言ひます。今の真言宗でも光明真言といふものを始終口に唱へます。光明真言といふのは、佛様、大日如來のお徳を稱へて、大日如來の力が自分の身に加はるやうにといふ祈願の心持を梵語で言つて、短い言葉で現しましてこれを繰返し唱へる。さうするとその口に唱へることに依つて、自分の言葉が自分の心の底に響いて、さうして

自分の心と佛様の心と通ひ合ふやうになるといふのです。これが真言宗の方で印を結び真言を唱へるといふことです。これは天台宗などではやらないから、そこで真言宗の方で、教理は大體天台宗と真言宗と同じだと言ふ。けれども天台の方では、お釋迦様を拜めとかお經を讀めと言つて、それは要領を得ないぢやないか、俺の方では印を結び真言を唱へるといふ形があるから、この形に依つて修行すれば自然に佛の心持と通ひ合ふやうになる。斯う言ふのです。そこで弘法大師などが大變その事を主張致しまして、理同事勝と言ふ。道理は同じだ、法華經の中で說いて居る事も、真言の方で說いて居る事も、道理は同じだ、併し事と言つて實行方法が自分の方は勝つて居る。天台の方ではたゞ佛を拜め、お經を讀めと言ふけれども、自分の方ではチヤンと手に印を結び口に真言を唱へるといふ實行の一一番適切な方法を

教へて居る。だから、事實行に於てはこつちが勝つて居る。斯ういふ事を申すのであります。それで眞言といふものは、支那の唐の時代に弘まり、日本には弘法大師が弘められて大變な勢ひを以て進んだのであります。併ながら根本を言ふと、理同といふのは間違つて居る。日蓮上人のお考では眞言の方の大日經に書いてある事と、法華經に書いてある事とは同じではない。法華經の方がモツと深入りして居るのであります。それを理窟は同じだと言つて、印と真言とを加へて自分の方を勝つて居るものであると言ふのは、これは佛の本當の精神に一致しない考へ方であるから、世間はこれに歸依するかも知らぬけれども、そんな事で本當の信仰は決定されるものではない。本當の信仰は佛様御自身のお言葉を本にしなければならぬ。その佛様御自身のお言葉に依るならば、法華經に於て、今こそ正直に方便を捨てて眞實の事を説くと仰しやつたのだから、その法華

經に基いて行くといふことが佛の御精神に叶つた信心の仕方である。斯ういふので、この法華經を弘める上から、法華經と紛らはしいものを一通り批判を加へて行かうといふのが、斯ういふ著述の主な理由になつて居る譯であります。

(第六講了)



國民的理想

上田辰卯

最近いろ／＼な仕事の爲に忙しくありまして、本年の新年の集りにも、又當館で催されますいろ／＼な會合にも兎角缺席がちになりまして、沟に申譯ない次第であります。

本日紀元節の佳節に當りまして、當館が建設されましてから五週年になります其の祝典を兼ねて、心からの集りが催されましたことを非常に感謝して居る次第であります。

私は餘り世間的愛國者でない加減か知れませぬが、日本の國の在るといふことを、どうも皆さんが感謝されるほど私には感謝されなかつたことが從來多かつたのであります。甚だ不忠のやうであります、遠慮のないお話がさうなのであります。それはどういふ譯であるかと考へて見ますと、私の受けた教育、其の年代、いろ／＼な關係、又私の持つて生れた果報といふやうなもの、いろ／＼あるのであります、大した強い刺戟を受けなかつたといふ關係もあるのではないかと思ひます。

よく人さまが、「外國に行くと日本の國の有難さが痛切に判る」斯ういふお話を承りますが、私は不幸にして、外國へ二度參りまして二度とも非常な侮辱を受けた次第であります、最初亞米利加に參りました時には、移民法案が通過致しました翌年であります、入國早々殆ど罪人に等しいやうな檢閲を受けまして、私と伴つて參りました者は移民館へ一週間も抑留されたといふやうなことでありました。それは日本人なるが故であつたのであります。其の次に

二年置いて歐洲に参りました時にも、是は又歐洲が戦争の爲に非常に疲弊を致して居りまして、唯其の間にうまくやつたのは日本人だ、經濟的に非常に恵まれたのが日本人だといふので、是は侮蔑でなくして嫉妬の眼を以て見られて居つたのであります。随つて皆さんから伺ふ所の、外國へ出ると國の有難さが判るといふことが不幸にして私には経験することが出来なかつたのであります。

ところが、それなりになつて居りますれば非常に不忠で終つたわけであります、其の後いろいろと本多貌下の御本を讀んだり、先生方のお話を伺つたりして居りますと、どうも自分の考へたことは餘り正しくないかも知れない、自分の狭い経験から判断することは宜くないのかも知れない、斯ういふことを考へて参りまして、やつと此の頃、自分の考は相當誤つて居つたといふことが解りました。

其の私の考へ方は少し違つて居りまして、是も或は皆さんから叱咤を受けることだらうと思ふのですが、何故有難くなつたかといふと、人間の成長の一つの階段として、其の過程として、どうしても國といふものが無ければいけないのであるといふことが、やつと此の頃少し解つて來たのであります。人間が成長して行く、向上してまゐりますと、自分ばかり榮をかゝらないで、お隣の人にも、又廣い範囲の人にも、延いては世界中の人達にも、自分の利欲を犠牲にして努めるといふことが、是が人類の理想であるといふことが解るのであります。斯ういふ意味で社會主義のやうなものも、自己の欲望を捨てゝ人類の爲に活動しろ、斯ういふ教へが出來たのであります。其の點は私も社會主義者と少しも違はないと思ふのであります。唯どうも吾々には、自分の利欲といふものと他人の利欲といふものとの間争がなか／＼激しいのであります、他人の利欲の爲に自分の利欲を犠牲にするといふ精神がハツキリと浮び出しません。餘りにそれが懸け離れて居る爲めではないかと思ふのであります、恰度小學校からイキナリ大學へ行くやうなことでありまして、自分の利欲からイキナリ人類の利益の爲めだ……斯ういふことは非常に飛躍をして居りまして、吾々にはチヨツト見當がつかないのであります。併し道理は正に其の通りでなくてはならないと思ひます。

す。

そこで私はだん／＼と自分の實驗から考へて見ますと、先づ小學校から中學校へ入らなければならぬ、或はそれから卒業して高等學校へでも入らなければならぬ。それで偶々國家といふものが、其の中學校に當るか、高等學校に當るか知りませんが、丁度さういふやうな階梯になるのではないか。是は國家を至上のもの、最高の目的として居りまする所の人達に言はせますと、お前は甚だ國家といふものの認識を誤つて居る、斯う言はれるかも知れませぬが、學問上の國家といふことは私には判りませぬけれども、唯自分の體験から得た國家に對する感謝の意とか、國家の必要の意味といふものを考へて見ますと、丁度一つの中學校か、高等學校といふやうな風に考へられるのであります。

先年、馬場前大藏大臣が増稅問題を發表致しまして、私の關係して居る事業には非常に重大な影響を受けるものでありますから、昨年の八月以來十二月の大晦日まで、凡そ三四十回大藏省へ参りましたし、随分激しい議論をし、又或は陳情もし、歎願もしたのであります、其の時にいろ／＼な経験を得ましたし、益々國といふものは大切なものだといふことが判つたのであります。そんなことが今時分判るのは非常に遅いのでありますけれども、遅くとも何でも少し判つて來ました。何しろあの廣汎な、非常に廣い範圍に亘つて居る大增稅を企てられましたので、各業者の代表といふやうな者が、殆んどあの廣い大藏省の廊下に一ぱいになるほど最初は詰め掛けて居りましたが、其の人々がどういふことを言ふだらうかと思つて、いろ／＼待つて居る間に多くの人の話を聞いて居りますと、「此の際の増稅はモウ已むを得ないのだ、吾々もサウ自分の懷ろ勘定ばかりはして居られないのだから是は已むを得ないが、是では立ち行かないといふことは結局國が亡びてしまふことだ」斯ういふやうなことが、殆んど代表者の人達の一一致した言葉であります。又大臣は迎もお忙しい方で僅か一度か二度お目に掛れただけであります、其の他の次官、局長といふやうな人になると、何れも皆國家を中心として居りまして、殆ど夏から大晦日までの間非常に苦心をされて居つたやうであります。『どうも君、忙しいから九時過ぎなら會へるかも知れない、九時から十一時頃までは割合に暇だから……』と

言はれるので、私は午前九時のことだと思つて居りまして、行つたところがさうではなくて、夜の九時から十一時頃まで漸く少し暇が出来る、甚しい時には午後の十二時、一時といふ時までも、大臣以下全部執務して居られるといふ有様であります。さうして其のお話が、『兎に角君、自分の利益といふことを考へての話ならば、お互に用が多いのだから廢さうぢやないか、唯どうしたら日本の此の財政が支へて行かれるかといふことを土臺として、君達當業者から、斯ういふ風にすれば宜いのだ、斯うすれば間違なく税金も取れるし、納める方でも疲弊しない、財源を潤らすといふことがないのだといふことを吾々に教へて與れるならば、如何なる時間を割いても會はうちやないか』斯ういふやうなお話であつたのであります。吾々も最初はまあ少しでも出す金が少い方がいゝといふやうな、チヨット不純な氣持を持つて居りましたけれども、屢々會つてお話ををして居る中に、全然さういふ氣持がなくなりまして、出來得る限り税も出して此の非常時、所謂準戦時時代を切抜けよう、斯ういふ氣持に次第になつて参りました。

其の時にいろいろ話をして、考へて居ります間に、吾々が自己の利益といふものを幾分か離れるといふ一つの階段に國家といふものが非常な役に立つたといふことが私は解つたのであります。役に立つたと言ふとをかしいのであります、どうしても國家といふものは無くてはならないものだといふことが解つたのであります。『個人の利欲の爲にする活動を制限する、さうすると自然に國家其のものも亡びる』斯ういふことを自由主義者は言つて居るのであります。私自信も永い間さういふことを教へられ、さういふことを考へて、人間の活動といふものは、國家とか、社會とかいふものの爲めではなくて、個人の利欲の爲に、所謂煩惱に驅られてする活動が、偶々多くの人の役に立つものだ、斯ういふ風に學校でも教へられ、自分でも思つて居つたのであります、それは丁度小學校に上つたやうな時代なのであります、それから少し人間が進歩して來ますと、所謂中學校程度の所になつて來るとさういふことはなくして、本當の人間の活動といふものは自己の利欲を離れた所に起つて來るものだ。決して自分の利益が殺がれるから働くのがイヤだとか、活動が鈍るといふのではないといふことが非常によく解つたのであります。

恐らく最近の軍事を初めとして、商工業といふものが非常な勢ひで、列國を指導するほどの勢ひを以て日本で發達して居りますが、それは皆それを代表する人々の考は、決して大藏省へ行つて一文でも税金が少なければいゝといふやうな考ではないのであります。皆税金は多く出したい、けれども之を潤らしてしまつてはならないから、コヽは一年延ばしたらどうだ、其の翌年に又繰延べたらどうだ、さうすれば餘計取れるのだといふやうなことから、所謂初めの出發點が、國家の財政といふことから出發して居るといふことは、私が此處で間違ひないと皆様に申上げていゝと思ふのであります。私が、自分の利欲を離れては人間の活動といふものは無いものだと思つて居りましたことは非常に淺い考であります、人間といふものは人の爲に動くといふ時にのみ大きな力が働くのだ、斯ういふことを考へたのであります。

ツイ二三日前でありますたが、警視廳の或る重要な役をされて居る方にお目にかかりまして話の序でに、『君、巡査といふものは泥棒を捕へる時は、普通の力ではどうしても泥棒の方が強いのだけれども、よく捕へるものだ』といふ話が出まして、『あゝさうですか、やはりサーベルや何かと怖いのでしょうか』『イヤさうぢやないのだ。巡査でなくて、私服の刑事でもよく泥棒を捕へる、それは普通の力しかない者が、二人力も三人力もあるやうな泥棒を平氣で捕へるのだ。それはやはり帝都の治安とか、自分の任務とかいふやうなことから出發する、そこに力が違ふではないか、斯ういふ風に警視廳のお警者さんや何かは心理的に考へて居るのだ』といふことでありましたが、それは大きに御尤な話であります。私は二宮尊徳先生などのことを伺つたり、又大きくは日蓮聖人のやうなお方の御一生の御事蹟を拜見致しますと、到底自分の利欲といふものから出發したものだといふことでは想像もつかないやうな大きな活動が起るのであります。斯ういふことは畢竟自己を離れた活動といふことであるのであります、吾々が理想とし、又それに従つて一生を送らねばならないといふ模範は、實にそこにあるのではないかと思ふのであります。

今日は紀元節でありまして、又一面建國祭なども賑に行はれて居ります、其の日に一番冒頭から、國は有難くない

のだといふやうなことから、非常に妙な事を申上げましたが、以前に私の考へましたのも、全然國が有難くないわけではない、其の有難味が他の方ほど感じなかつたといふことを申上げたのであります、現在では吾々の進歩發達の爲には無くてならないものが國である、斯ういふことが漸く遲鈍ながら解りましたので、其の一端を申上げて何かの御参考になれば幸ひだと思ふ次第であります。(拍手)

謹 告

本多上人第七周忌法要を各方面皆合同して相營むべく相圖り申候得共思ふに不任候儘本部に於て左記の通り奉行仕候間此段謹告候也

一、日時 三月十三日(土)午後二時開筵

一、場所 統一會館於階上

一、法要後品川妙國寺墓參

一、其他の行事は翌十四日の記念會に合流

財人	團	以	上
----	---	---	---

きはみなく教は遠くかがやかん

我が日本のその如くに

續いて山田博士の祝辭が代讀された。

統一會館創立五周年に際して

本記開館第五周年記念

本年の紀元節は恰度舊暦正月元旦に相當し、遠く上古 神武の昔を追憶すべき寛に有難い年である、而して尊皇愛國の叫びが一入力強くこの紀元節に際して讃歎されることは嬉しい次第である。この佳節に本部は開館されたのであつたが、本年は早くも五周年となる、この間一千八百餘日を省みてお恥しい事のみ多くて慚愧に堪えない。

今や本國無裁本多日生大僧正遷化後第七周年、教界大に憂ふべき現狀が割々に深まりつゝあるかの如く想はれる、同人の反省自重以て護法愛國の實を擧げねばならぬ、此の記念すべき日に於て浩筵を張り、一同は講堂に於て午後二時より小西、和賀兩師を中心にして立正安國の懇請を掛けた、諸先生も各閣下も賛賛一如して嚴修し奉つたのであつた。法要後、磯部理事司會の許に、本郷日當居士左の和歌をお詠ひ下さつた。

建國を祝ふよき日に生れ出でて

こゝに五つの年を迎へぬ

法と國冥し合ふらん月も日も

同じ佳節に基開きて

きはみなく教は遠くかがやかん
我が日本のその如くに
續いて山田博士の祝辭が代讀された。

本多上人遷化の後 法燈愛護の精神より萬難を排して遂に落慶を見たる統一會館を師孝の結晶として尊く仰いだのは五年以前の事であつた。爾來今日に至るまで弘法に、研究に、修業に、將又雑誌の經營に、同志諸君が粉骨碎身の精進を續けられつゝある道場として更に尊く仰がれるのである。

雑誌一種の發行さへ實に容易の業ではない、然るに當會館では「統一」と「教」とが發行されて居る。而も其各々の誌上には、本多上人が在世中未だ誌上に發表せられざりし講演速記が懇切に整理されて今尙新しく掲載せられて居る。

此の處は、本多上人が棲神の家であり、又上人が此處で現に生きて此等の誌上に新しき說法を續けて居らるゝものである。
此の會館の内に同志諸君の求道心が何時も生き／＼と躍動して居る様に思はれるのは誠に頗もしい。
現今に於て 日蓮大聖人を讀ふる者は必ずしも勤しとしな

いが、眞に大聖人を知る者は今尙曉天の星よりも稀であることは大聖人の門下として如何にも遺憾千萬である。

徹底的なる研鑽と修行と體験との上に立上つて大聖人を下劣なる喧嘩の中から取戻し、汚がされたる御題目を浮めて、正しく如來一代の修多羅の上に置き之を萬人に仰がしむる者は誰ぞ。私は必ずしも急がうとはしない、今から十年の後、二十年の後でもよい。願くは眞に法華經の行者に相應しき充分なる修行と用意とを具備して大聖人の眞骨頭を宣揚すべき大導師が、此の會館の中から生れて眞に本多上人の理想を實現するに至らんことを衷心より切望して止まない者である。

一言所懐を述べて祝辭に代ふ。

昭和十二年二月十一日

山田三良

御異例中の佐藤鐵太郎中將は、殊にお心に受け下さつて

謹て開館五周年を祝し君國の爲め彌々御奮勵を望む

といふ策略の特電を寄せられたり、臨席不可能を遺憾とするとの御

傳言を載いた。又本門法華の三吉顯隆師からも

五周年記念の祝典に當り正法興隆の運動を感謝し 猶一陣

の精進を祈る

との御懇意な熱情の籠つた電報を、極めて交通不便な海外から要々

その爲めに人を遣はされた御様子に有難い感激の涙が溢み出る。

福島支部報

編輯室より

一月二十三日 午後三時半より高商生徒集會所に於て本年最初の日蓮聖人讚仰例會を開催す、前回に引續き磯部先生の壽量品の御講話拜聴す、學校より校長先生、會長吉松先生、高橋先生の御出席あり、五時半散會。

夜は七時 より大町中村家にて信者多數參會の上例會を開く、先づ

先生より本年干支丑年に因みたる興味ある御話に引續き日蓮聖人御遺文に依り聖人の女性に對する有難き御法話を承る。九時半より一般座談會に入り入江大佐の年頭所感各自質問等あり、十時半盛會裡に散會。

二月四日 午後三時二十分より高商に於て例會を兼ねて日蓮聖人讚仰會員三年生諸兄の送別會を行ふ。磯部先生の御來顧を仰ぎ前回に引續き壽量品の終講を拜聴す。御法話終了後直に卒業生送別會に移る。雪のある寒い日にも拘らず校長先生初め諸先生並に支部より多数御來會あり六時盛會裡に散會。

夜は七時より大町中村家に於て座談會を開く。先生より日蓮聖人が吾々信者に教へられる御信に對する態度に付有難き御法話を承る、次いで一般座談會に移り岩淵少佐の「いろは」歌に就ての御話、其

他種々質問意見の交換等あり十時半散會。

其他 市原求氏も開館五周年を耳にせられて非常に御繁用の中から特に誠意の溢れた祝電をお寄せ下さつた。此の電文抜露を終つて、講演の幕は開かれた。

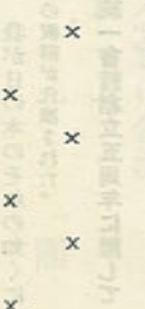
上田理事長は最近特に忙しく、殊に本日は大切な御用件もあつたらしいが、色にも出さず本部第一の大室なりとばかりにお力を注がれて、前掲の所感を述べられた。

小林一郎先生は「廣宣流布の意義」と題して甚だ有難い此場面に相應はしいお話を平易懇切に談笑の間になされた、續いて、岩野直英少将は「信仰と貞心」といふことに關して御自分の軍人らしいお心持を卒直にお述べ下さつた。

時間の關係上、小西日喜師最後の挨拶を結ばれてから落葉に移つた。

翌晩講演の宗家である水越田谷源氏から「日蓮聖人御難」の一席を、其の至誠を傾けて彈じつ語りつゝ演説人なきが如くに藝術博道の精妙な發揮され、今更ながら大聖人御前に彷彿たるの念を強め、最終の實を詰められたことは洵に嬉しいことであつた。

五時三十分來會者一同へ本多上人著母とお菓子を夫々御供養して唱題しつゝお別れした。



人上生日
忌周七第
號念記

統

法財
人圓

統

團發行

次 目

繪 口 青年時代の本多上人と其一家
第七周忌記念講演會

大藏經要義續篇(其二).....	本
阿舍の人身觀(中之三).....	本
本多上人第七周忌報恩會	多
○本團の行事	日
清 水 姉 田 中 正 治 學	生
龍 山 本 多 賴 三 郎 操	日
本 多 上 人 を 憶 ふ	生
○編輯室より	